



ひこばえ



発行 京都教区教化委員会

教化本部企画室

075-351-5260

kyoto@higashihonganji.or.jp

若狭地区 懇談会

過疎地における

「構造的課題」

若狭は、古代より「御食国（みつづくに）」として、塩や海産物などの豊富な食材が畿内に運ばれ、また海運を通して大陸との交易の拠点ともなっていた。若狭の中心都市である小浜市は、鯖街道往来の起点として、古くから食材だけでなく様々な物資や人、文化が結び付き、若狭の小京都として独自の伝統や風習が残っている。

今回は鯖街道熊川宿に程近い、若狭町の山間に佇む法順寺を会場に懇談会を行った。

■11月13日(木)午後1時30分

■若狭地区参加者(住職4名 門徒10名)

本部専任委員(1名) 駐在教導(3名)

▼若狭地区は、若狭第1組(小浜市・大飯郡・舞鶴市) 若狭第2組(三方郡美浜町・三方上中郡若狭町)の28ヶ寺により構成される。▼若狭湾沿岸を南北に広がるこの地域は、山間部に寺が広範囲に点在し、いずれの地域も著しく過疎高齢化が進んでいる。▼懇談会に先立ち、両組長よりそれぞれの教化事業の現状と課題が話された。もともとの寺院規模が小さい上に、人口減少のため住職はいずれも兼業で、代務寺院も増加している現状を受け、教化事業を進めていく上での「構造的課題」があることが語られた。▼若狭第2組では二百年以上続く「法中報恩講」と呼ばれるものがある。これは組内寺院が毎年輪番制で会場を受け持ち、組内住職と門徒が一堂に会し、組の報恩講を勤めるというもので、事前に声明の講習や、当日は帰敬式を実施するなど、組の教化事業の軸となっている。▼数

十年続く推進員協議会も、この地区の教化を支える大きな存在となっている。推進員が住職の「尻を叩き」、寺の行事や学びの場を動かしてきた歴史が語られ「寺の力が弱くても、推進員が地域教化の要となりうる」という認識が共有された。

鯖街道の発着地



福井は敦賀を境に嶺北(越前国)と嶺南(若狭国)に分かれる。嶺南は文化的にも関西の影響が強い

参加者の声

◆若狭第2組教化委員会の主導で、住職・総代・門徒会が一堂に会する「役職者研修会」を実施。内容は各寺院の現状共有、組としての問題意識・方向性の確認、過疎地での現実的な教化の在り方を協議する場が継続的に持たれている。

◆旧上中地域の寺では「合同法事」(年一回、対象門徒が全員まとめて本堂で年忌法要)や、「回し焼香」(セレモニーホールでの葬儀時、焼香だけして帰ること)など、特にコロナ以降、伝統的な仏事の変化と崩壊に対する懸念が語られた。

「教化施策だけでは現場は持たない」

◆山間部の人口減少は寺のみならず地域共同体の崩壊を意味する。「町内は急激に過疎化が進み、80軒あった集落が団塊の世代が亡くなるとう軒ぐらいいなくなる」「少ない門徒で寺を維持することが困難なため、寺を離れる門徒に30年分の護持費の離壇料を設定した」寺を出るのか、残るのか、苦渋の選択と苦肉の策が語られた。

◆「過疎地の課題は教化だけでは解決できない。過疎地域では、教化・組織・財政は切り離せないもので、教化施策だけでは現場は持たない。これを教化部門だけの課題ではなく、教区全体の課題として捉え直すべきではないか」との提言を重く受け止めた。

◆寺院統合について「人口減少を考えれば統合は避けられないのではないかと」という声と「寺ごとに文化が異なり、簡単に一つにはならない」という声。「歴史や地域文化を大切にしながら、時間をかけて合意形成する必要がある」

雑感

若狭地区懇談会では、2つの班に分かれて各寺院の様々な状況について忌憚なく話し合いをしました。話し合いの中で、若狭地区のどの寺院も抱えている「過疎化が進んでいる」が話題に上っていました。この先、寺院数が少しずつ減少していくことは間違いなく、思われまます。また、若い人たちの寺離れの問題が深刻になりつつあります。このようなかたて、教化活動をどうすればよいのかということが問われてきます。この問題は、私自身のお念仏の歩みそのものへの厳しい問いとなつてはたつきかけてきます。数の問題ではなく「お念仏の道」を光輝巍巍として歩む人たちがここにいてほしい。それが大切であり、それしかないと思えます。そのような観点から、懇談会では私自身の教化の場だと頂いていきます。その意味で懇談会は大変な場であり、若い人たちが集まり忌憚なく話し合える場に拡大させてほしいと願っています。

若狭地区教化委員長
法順寺住職 堂谷昌孝

